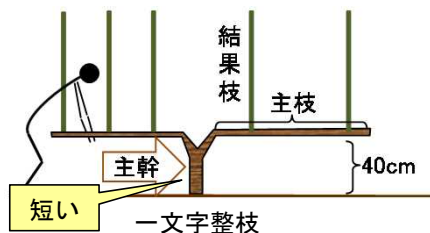


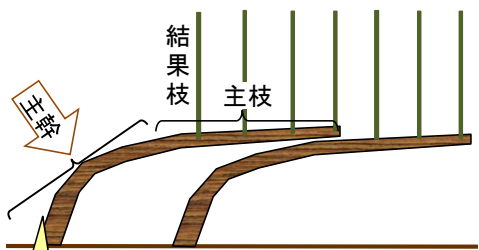
1 県下のイチジク栽培状況

- ◆栽培面積：70.7ha、出荷量：1,467t → 全国3位（H27年産）
- ◆気象変動の影響で凍害の発生が増加傾向で、生産拡大の障害になっている。
- ◆多くの産地が一文字整枝で栽培している（現在の整枝法）。



- 樹形がシンプルで管理が容易。
- 作業性が良い。
- ×凍害に弱い。
- ×結実が安定しない（特に若木）。
- ×着色不良が発生しやすい。

2 新たな整枝法（オーバーラップ整枝）



- 主幹部が長く貯蔵養分が多い。→品質向上、収穫時期の前進化。
- 隣接樹の主枝が主幹部の上に重なる。→凍害回避や日焼け軽減効果。
- 作業性、栽培管理は一文字整枝と同様。

【特許出願中：特開2016-21902号】

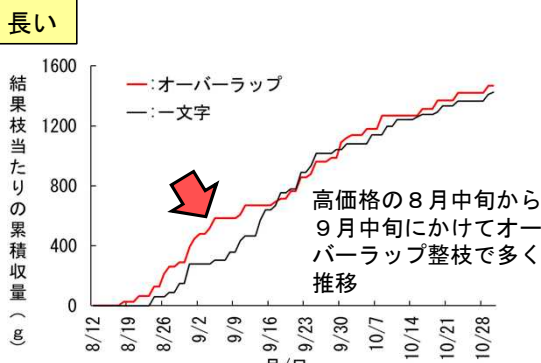


図1 樹形の違いが結果枝当たりの累積収量に及ぼす影響

収穫時期の前進化



オーバーラップ整枝で栽培されているいちじく園（淡路市）

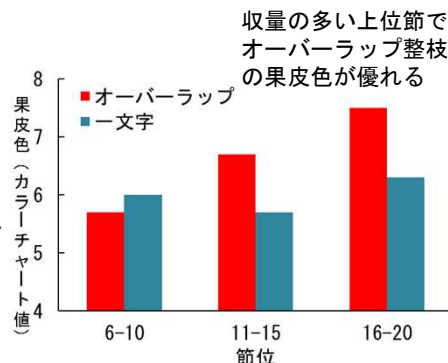


図2 樹形の違いが果皮色に及ぼす影響

果皮色の向上

【普及状況】（H30年、4月時点）

淡路地域：約1.0ha
神戸市：約0.7ha

3 オーバーラップ整枝をベースとした新樹形の開発

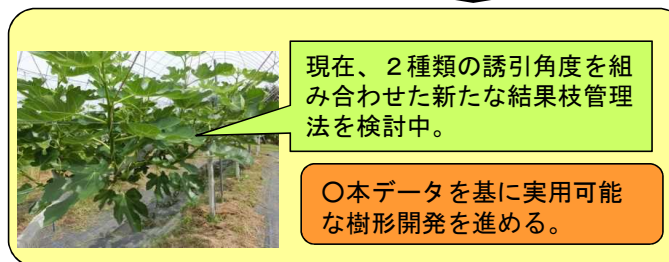
(1) 新樹形開発のためのシーズ研究（H28-30）

〈目的〉

オーバーラップ整枝で得られた栽培特性のメリットを生理的に解明する。

〈成果（H28-29）〉

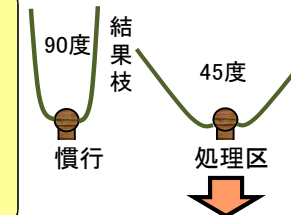
- ・主幹部が長いと結果枝中のショ糖含量が増加し、果実の成熟期間の短縮につながる可能性がある。
- ・枝の誘引角度※を倒すことで、枝中のショ糖含量が増加し、果実品質の向上につながる可能性がある。



現在、2種類の誘引角度を組み合わせた新たな結果枝管理法を検討中。

○本データを基に実用可能な樹形開発を進める。

※誘引角度の変更実験



品質向上の可能性

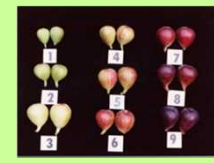
(2) オーバーラップ整枝における栽培管理法の確立【仮称】（H31～）

〈目的〉

市場単価が高い収穫期前半の収量増加が可能で、高品質な果実を安定生産できる新樹形の開発と栽培技術の確立を目指す。

〈効果・目標〉

- ・収穫期の前進化 → 9月上旬までの収穫割合を従来のオーバーラップ整枝に比べ20%増加。
- ・収穫量の増加 → 着果開始節位を1段下げる。
- ・低位節での果皮色の向上 → 既存の産地基準に比べカラータン値を1上昇。



カラーチャート

開発技術は果樹生産新技術実証事業等を活用し、行政と普及が一体となり新植園への導入を支援。

成果の普及

オーバーラップ整枝でイチジクを栽培する場合、事前に兵庫県から出願中特許にかかる許諾を受ける必要があるが、県内の生産者については許諾実施料は無料。

○凍害回避に有効な樹形をベースとした栽培管理法を確立し、凍害発生の危険度がやや高い地域でのイチジクの栽培が可能となり、栽培面積の拡大につながる。

【H37年度目標】

栽培面積：100ha、生産量：2,400t（兵庫県果樹農業振興計画、H28年7月策定）

○高品質果実の生産拡大が可能になることで、県産イチジクのブランド力の向上につながる。